

新中国成立前後の中国社会学者の状況

——孫本文を中心に——

星 明

〔抄 録〕

中国では1949年に、共産党政権が成立した。そのことによって、それまで中国で50年の歴史をもつ社会学と社会学者に劇的な変化が生じた。共産党政権は、社会学の研究を禁止し、タブーとした。社会学者たちには専門を変えさせたり、別の仕事に従事させて冷淡な扱いをした。

ここでは新中国の成立以前の著名な社会学者孫本文を取りあげ、かれの研究活動、社会学説、社会主義に対する見解、かれの社会学説に対する共産党側からの批判などを扱った。孫本文が、1949年の社会体制の変化によって、その社会学の研究活動を停止させられたことを明らかにした。

キーワード 中国, 孫本文, 社会学史, 社会体制, 社会主義

はじめに

中国の社会学は解放前にはほぼ50年間存在し、そして解放後約30年の中断を経て、1979年3月に再建された。中国の社会学は、2004年現在、再建後4半世紀が経ったが、その1世紀にわたる歴史は、主として社会体制や政治からの影響によって紆余曲折したものであった。

ここでは、中国において社会学や社会学者と政治とのかかわりの具体的状況を知るために、ある1人の社会学者に焦点をあてて、解放前の1920年代から1948年の間、そして解放後の1949年から1950年代の間の、中国における社会学と社会学者の状況について考察する。取りあげる社会学者は孫本文である。かれは解放以前の中国でもっとも著名な社会学者であり、もっとも多くの著作をもった学者であり、かつ中国の大学における社会学のなかでもっとも影響があった人物である⁽¹⁾。

かれが中国の社会学界に対してどのような貢献をし、当時中国で台頭しつつあった社会主義や史的唯物論にどのような見解をもち、かれの社会学が新中国の成立後どのような処遇をされ

たかを述べたい。

1. 孫本文の経歴と業績

孫本文（1891-1979）、字は時哲といい、江蘇省の呉江県の生まれである。中国社会学の開拓者の一人である。1918年、北京大学文科哲学専攻を卒業し、同年南京高等師範学校附属中学の教師になった。1921年、アメリカに留学し、主として社会学を学び、それ以外にも経済学、教育学を学んでいる。コロンビア大学、ニューヨーク大学で学び、続いてイリノイ大学で修士、ニューヨーク大学で博士の学位を得ている。

1926年、帰国後、上海の復旦大学で社会学を講じ、1928年に南京の中央大学社会学部の教授に就き、そこでは長年にわたって学部長を務めた。その間にも、呉澤霖、呉景超とともに上海で1928年に「東南社会学会」を立ち上げ、第1, 2, 7期の正理事に着任している。この学会は1929年7月には、学会誌『社会学刊』⁽²⁾を創刊し（1948年停刊）、かれは主編者としての任に就いている。1929年には、編集責任者として『社会学叢書』（15巻）を、さらに大学の講義用のために共編者として『社会学大綱』を出版した。社会学を一般に広めるために、また社会学の大学教育のために努力したことが伺える。1930年、孫はこの東南社会学会を北京の陶孟和、許仕廉、陳達らと共同で全国規模の「中国社会学社」に発展させた。

新中国の成立（1949年）以後は、南京大学地理学部、哲学部教授、江蘇省人民政治協商会議第1回～4回委員、南京経済学会副会長、江蘇省哲学社会科学聯合会理事などの職に就いた。

かれの主要な著作は次のとおりである⁽³⁾。

- （1）社会学上之文化論，1927年，北京朴社。
- （2）社会学 ABC，1928年7月，世界書局。
- （3）人口論 ABC，1928年，世界書局。
- （4）社会学的領域，1929年，世界書局。
- （5）社会文化的基礎，1929年，世界書局。
- （6）社会変遷，1929年，世界書局。
- （7）社会学原理，1935年，社会学原理（増訂上下二冊），1944年，商務印書館。
- （8）中国社会問題，1939年，青年書店。
- （9）社会学名詞，1941年，国立編訳館編訂。
- （10）現代中国社会問題（第一冊 緒論及現代中国家族問題，第二冊 現代中国人口問題，第三冊 現代中国農村問題，第四冊 現代中国労資問題），1942～1943年，商務印書館。
- （11）社会調査方法与表格，1944年，商務印書館。
- （12）社会思想，1945年，商務印書館。

- (13) 社会心理学, 1946年, 商務印書館。
- (14) 近代社会学発展史, 1947年, 商務印書館。
- (15) 当代中国社会学, 1948年, 勝利出版公司。
- (16) 社会行政概論, 1949年, 中国文化服務社などである。

上に挙げた, 著作のなかで, かれの代表作は社会学原理であるが, 同時に 1949年以前の中国社会学の理論的研究の代表作でもある。

この著作の出版にいたる経過を孫本文は次のように述べている。すなわち, 「著者は民国 15 (1926) 年から社会学を教えるはじめて, 相次いで大学で普通社会学の講義を 9 回行なった。最初のうちは西洋の本を教科書として使用したが, その教材はわが国の学生用には不適切だと感じた。だから教材を探し, 自分で講義案を編集し, 当時学生の参考にわずかの部数を印刷した。欠点がまだまだ多いことを自覚していたので, 世に問うことはできなかった。しかし, 年を追って修正したり, 改正して, それが 7 回に至った。ちょうど商務印書館の王雲五氏の勧めもあり, まとめにかかった。教科書の形式にして, 学校の必要に答えようとしたものである」⁽⁴⁾。

上の著作リストから, 当時のかれの学問的生産性がいかに高かったがわかる。しかし, 中国は, 1949 年以後, 大学における社会学部の継続と学問としての社会学の継続を許さなかった。この事情は, まったく孫本文にも当てはまった。

2. 孫本文の社会学説の背景とその特徴

孫本文はアメリカに留学中, 社会学者 F. H. ギディングス, R. E. パーク, W. F. オグバーンらから教えを受けた。それゆえ, 心理学的社会学及び文化社会学からの影響を深く受けている。これはかれ自身がその著『社会学原理』のなかで「著者個人の見地は, オグバーン, トマスの両教授からもっと多くの影響を受けている。だから, 本書は全体にわたって文化と態度の論議にとくに力を入れている」⁽⁵⁾と述べているとおりである。かれは一方では, 中国の社会学の建設も提案しているが⁽⁶⁾, 西洋の社会学を中国に紹介することに大きな貢献をした。

香港の社会学者黄紹倫は, 中国における第一世代の社会学者の思想的淵源は, 主要な刊行物にはっきりみられるといい, その証拠として, 中国の社会学機関誌の『社会学刊』(東南社会学会, 中国社会学社編輯)はその創刊号(1929年7月)には, W. G. サムナーの特集を組んだこと, また『社会学界』(燕京大学社会学部編輯)はその最終刊に文化人類学のロンドン学派の特集を組んだこと, また各号でラドクリフ＝ブラウンの特集やパークの論文をコレクションした特集を組んだことをあげている⁽⁷⁾。まさに当時の代表的な大学の社会学部や社会学者は西洋の社会学を指向していたことがわかる。

孫本文の主著社会学原理の中心論点は文化と態度にある。孫本文によれば, 文化は「人類が

苦心と労力で、環境に適応するために作り出した産物である。人類は文化をつくって、文化を累積し、文化を伝え、すなわち文化を用い、文化を広めてきた。そして、人類は文化から離れることができないし、文化は人類社会の一種の勢力であり、一種の支配の勢力である。人類の生活のすべての要素で、文化が貫いていないものはないし、文化に支配されていないものはない」⁽⁸⁾という。そして、社会学の研究の中心課題は「人類の文化であり、文化の具体的な表現は人間の社会的行為である。この社会的行為をとおしてのみ、具体的に人びとの活動の法則を掌握することができる」という。そして、孫本文は「社会学とは社会的行為、そしておそよ社会的行為と関わる諸現象を研究する科学である。社会的行為の共通の特徴、社会的行為の相互関係、社会的行為の規則と変動などはすべて社会学の研究範囲である」⁽⁹⁾と定義している。孫本文は、社会的行為が社会学の研究対象だとし、社会体系の基礎だという。ゆえに、社会的行為を起点にして、それに関わる 5 つの重要な社会学の内容を導き出している（表 1 参照）。すなわち、(1) 社会的行為の因素（または社会的因素）、(2) 社会的行為の過程、(3) 社会的行

表 1 社会学の内容



出所：孫本文，1935 年，社会学原理，商務印書館，pp. 114-115。なお、英語の述語は同書の「附録二 社会学名詞漢訳表」にリストされたものを記載した。

為の組織（あるいは社会組織）、(4) 社会的行為の統制（あるいは社会統制）、(5) 社会的行為の変動（あるいは社会変動）である⁽¹⁰⁾。このなかで、(1) から (4) が静態的で、(5) が動態的な側面である。

文化の問題以外に、孫本文のもう一つの重要な関心は上にあげたように、態度の問題である。かれは「行為の趨勢は社会学では態度という。一切の社会的行為は、その始まりはすべて態度に源泉があり、態度の刺激交差と反応が社会のさまざまな行為を生みだす。ゆえに、態度は社会的行為の基礎になる」⁽¹¹⁾という。態度と社会変動との関係については、次のようにいう、すなわち「社会変動は、簡単にいえば、つまり社会状況あるいは社会制度の変動である。この状況と制度は自ら変動することはできないから、変動の原因は社会における状況と制度に対する人びとの態度によって変動が起こることにある」⁽¹²⁾という。このように、社会的態度と社会変動の密接な関係を指摘している。さらに続けて、態度と社会問題との関係については「社会には多くの問題があるが、常に、社会状況あるいは制度に対して人びとが不満を感じたときや、改革を要求するときに起こる。だから、多くの社会問題は、その発生の根幹はすなわち態度にある。無論、社会状況がいかに悪くとも、社会制度がいかに適応してなくとも、もし人びとがそれに対して不満を感じないならば、問題は存在し得ない」⁽¹³⁾という。

このように社会生活に対して社会的態度は大きな影響を及ぼしているという。孫本文は「社会は人から成っている。社会現象は人によって作られている。そうして全体としての人は態度で具体的にあらわすことができるのである。社会のさまざまな現象は、すべて態度と密接に関係して発生するということができる」⁽¹⁴⁾という。この考えは心理学的社会学のカテゴリーに入る。

孫本文のこれらの視点は、基本的に、1920年代のアメリカにおける心理学的社会学及びそれへの批判として生まれたアメリカ文化社会学の双方の影響を受けたことによるものである。事実、上で述べたように、かれ自身もシカゴ学派のオグバーン、トマス（両者とも文化概念を広義に捉える立場）からもっとも多くの影響を受けたといっているごとくである。

いずれにしろ、孫本文が1920年代末から40年代末までの20年間に、中国の社会学の発展に果たした役割は計り知れないといえる。中国に関する社会学の著作をもつ福武直はかつて、当時の中国の社会学について「社会学の概説書も、30年代にはかなりの数にのぼったが、とくに私の専門とした農村社会学や社会調査の書物は、その刊行点数において、はるかに日本のそれを上まわっていた。・・・中国の社会学は、1930年以降大きく開花し、分野によっては日本の社会学以上の業績をあげていたとみてよいし、英文の刊行物を通じ、日本社会学よりも、はるかに国際的にしられるようになっていた」⁽¹⁵⁾といったが、それを支えた代表的社会学者の一人が孫本文であった。

しかし、新中国成立後、孫本文の観点は唯心論だとして、批判の矢面に立つことになるのであるが。

3. 孫本文の史的唯物論に対する見解

当時、中国の社会学には二つの主流があった。一つは上に述べてきた文化学派である。その代表的な人物は孫本文、楊堃、黄文山、陳序經、吳文藻らである。もう一方の学派は唯物論派である。李大釗、瞿秋白、陳翰笙、李達、許德珩、李劍華、嚴景耀、雷潔瓊、李平心、馮和法らがその代表的な人物である⁽¹⁶⁾。

ここでは、孫本文が当時の社会主義と史的唯物論に対してどのような見解をもっていたかをみたい。長文であるが、重要であるので引用し、紹介しておきたい。

「この時代の人にも、社会学について二種類の誤解がある。その一は社会学を社会主義と混同する誤解である。社会学の発展の初期には研究者も少なく、社会学の知識はあまり広まっていなかった。社会学という名前に接することがないので、この種の誤解があった。しかし、社会学が既にかなり発展した現在においてもこの種の誤解があることは学界にとって不幸なことである。わが国の書店においてある社会学の本はただ往々にして社会学の名をおもてにだし、社会主義を解釈したもののみならず、いわんや社会主義者が社会学者といわれたりする。そもそも社会学は一つの科学であり、社会主義は一つの主張である。両者にはそれぞれ領域があり、混同することは許されない。このわたしは決して社会主義を研究することに反対するものではない、社会主義を社会学として、社会学を社会主義と混同することに反対するのである。その二は社会学を一つの唯物史観とする誤解である。最近、社会学が研究する学理を一種の史観とする人があるが、これは一種の主観的な見解である。わたしはしばしばいわゆる唯物史観社会学などという名称を聞くが、そもそも社会学は科学であり、科学が研究する対象は客観的な現象である。科学者の任務は科学的方法を用いて客観的な現象を分析することである。つまり、物は物であり、心は心であり、文化は文化である。はじめにいかなる予断ももたないという見解である。科学者は肉眼で客観的な現象の真相を分析するのであって、色眼鏡で事物を観察するものではない。ゆえに科学者の態度は客観的であり、事物の實在に合わせて見解を移すのであって、事物を主観的な見解に合わせるものではない。最近、社会学者は文化と社会生活との密接な関係を理解し、文化を重視する分析者はただ客観的な文化の分析を重視する。社会現象の真相を理解するために、はじめに主観的な見解をもつてはいけぬ。社会現象を解釈するかなめは観点は観点、科学は科学として、両者を混同して論じないことである。わたしは唯物史観を研究することに反対するものではない、唯物史観で社会学を解釈し、社会学を一種の史観とする主観的な見解に反対するのである」⁽¹⁷⁾。

上の社会学と社会主義や史的唯物論とを区別する考え方は、当時、欧米で社会学の教育を受けた研究者の考え方を代表している。しかし、この孫本文の社会学観は新中国では、徹底的に批判されることになる。

新中国は、社会学の存続を許さなかった。それは1979年3月まで続いたのである。

4. 孫本文の社会学説に対する批判

上にあげたような孫本文の社会主義、史的唯物論についての見解に対する共産党からの批判は激烈であった。というのも「孫本文は欧米の社会学こそ正統であり、学問的であり、科学であるとして、社会主義は主張であり、観点であり、宣伝であり、社会運動であるといって、社会主義や唯物史観を理解していない」⁽¹⁸⁾からという。しかし、ここでは政治レベルの議論ではなく、学問論としての議論を取りあげたい。

韓明謨は孫本文の業績を高く評価すると共に、マルクス主義、史的唯物論の立場から学問論として孫本文の社会学説、とくに社会学原理の基本的視点の欠点を指摘している。韓は、孫本文が社会学原理やその他の著作のなかで完全に「マルクス主義社会学」(韓明謨の表現による)に対して排斥する態度を採っているという⁽¹⁹⁾。韓明謨は、孫本文のこの態度について、「孫本文は老いるまで一筋に研究に励んだし、著作もとても豊富だけれども、かえって『目をはるものではない』といえる。孫本文は思想的偏見によって、自らの眼がぼけてしまい学問を深く研究することを困難にしてしまった」⁽²⁰⁾といている。「孫本文は、『科学』としての社会学の旗を揚げたけれども、どこまでも現実をみることをせず、事実を抹殺した。このこと自身が科学的でないことであるし、主観主義的である」⁽²¹⁾。

韓明謨は、孫本文のマルクス主義に対する排斥といているが、前ページの引用からわかるように、孫自身はマルクス主義、マルクス主義社会学という用語を使用していない。使用している用語は、社会主義と唯物史観である。そして、飽くまでも、社会学と社会主義及び唯物史観とを混同する誤解を戒めているのである。ましてや、社会主義も史的唯物論を否定していないし、それらを研究することに反対していないのである。しかし、マルクス主義を史的唯物論と一体視する立場、あるいはマルクス主義社会学の方法論的基礎として史的唯物論をとらえる立場を採る中国の社会学者にとっては、韓明謨に代表されるような孫本文批判は当然の帰結であるといえる。

韓明謨はつぎのようにいう⁽²²⁾。孫本文は、社会は4つの要素、つまり地理、生物、心理、文化の要素から成っているとするが、これなどもマルクス主義の観点からすれば矛盾百出である。唯心論的であり、この観点それ自体に問題がある。これらの要素はもし存在するとしても、異なったレベルの問題であり、心理的要素は存在の反映であるし、それらの要素が相互に関係してどの程度社会に対して影響をもつかも分析されていない。このことは孫本文の社会学原理以外の著作でもみられる。結局、孫本文は自らを心理学派にも文化学派にも属さないといい、総合的、全体的、系統的な観点をとるといって、ぼろをだしてしまったと。

アレックス・インケルスはその著『社会学とはなにか』のなかの「社会学と自由社会」の項

ので、社会学は自由社会においてのみうまれることができ、発展することができるというエミール・デュルケムの見解を紹介した上で、ロシアでソヴェト政権が建てられたとき、そして中国で中国共産党が政権を把握したとき、社会学及び社会学者がたどった運命を紹介している。ここでは、中国に関してのみ次にあげておきたい。「共産主義者の支配がはじまるまえに、中国の単科大学や総合大学には、約 **140** 人の教師のもとで、**1000** 人以上の学生が社会学を学んでいた。しかし、新しい政権はこれらの活動を完全に踏みつぶしてしまい、マルクス主義に関する新しい課目にとりかえた。生き残っている社会学者たちは、彼らの過去の職業のゆえに日陰者の生活をおくっている。新しい政権が支配を確立する以前に、社会学に関する一流の論文を書いた孫本文博士は、彼の一連の著作がほしいと手紙をおくったアメリカの社会学者に対して、次のようにゾツとするような返事を送ってきた。『私のすべての著作は、焼き捨てられるだけのものでしかないということを、私は理解するようになりました。したがって私は、あなたに送るべき何物ももっておりません。私はまた、以前にはカール・マルクスの著作を研究することを怠っていたということを学び、今では毎日それに多くの時間を費やしています。どうか二度と手紙をくださらないように』⁽²³⁾と中国での社会学と社会学者の状況を紹介した。

おわりに

——孫本文によるブルジョア社会学批判——

孫本文は、**1957** 年の反右派闘争のなかで、「ブルジョア社会学の復活に反対する」という文章を書き、これまでの自分の研究の反動性を認め、そのすべてを否定した。マルクス＝レーニン主義が社会学に取って替わるとした。その文章は次のようである。「わたしは旧社会で、ブルジョア社会学を学び、かつ長期にわたって研究に携わってきた。・・・いま、自分の古い思想を完全に改造し終わったとはよういわないが、ただブルジョア社会学は極端に反動的であることを認識するに至った。・・・ブルジョア社会学はブルジョアの利益に奉仕し、資本主義体制に奉仕する。これがブルジョア社会学の本質である。ブルジョア社会学は一般理論にでも、また具体的な研究においても、人民の政策に反する反動的思想とブルジョア思想を宣伝している。・・・右派はなにゆえブルジョア的社会調査を誇張するのか。・・・費孝通の『重訪江村』の調査はこの右派の調査の好例だ。費孝通の調査は、階級分析の重要性の軽視があるし、解放後の巨大な成果を故意に低く評価している、党の指導や社会主義の優越性に反対ならびに疑いをもっている、公然と帝国主義国家のために奉仕している、という例である」⁽²⁴⁾。

ある中国の社会学者は、この文章は孫本文の意思ではなく、書かされたものであると筆者に語った。その事実は確認のしようがないことであるが、孫本文が社会主義や史的唯物論に対して、すなわち社会理論に対して見解を述べているのは **1948** 年までのことである。**1957** 年に書かれた上の見解は科学外的なイメージで述べられている。もちろん、かれはそのことをじゅ

うぶんに認識していたであろう。したがって、孫本文の1949年以降の論述をもって、かれを社会学者としての評価を行うことができないと筆者は考えている。

〔注〕

- (1) 韓明謨, 1985年, 中国社会学史, 天津人民出版社, p. 118。
- (2) 1929年7月の創刊号から1937年の第5巻第3期まで定期的に刊行されたが(季刊), 1937年から1948年まで日中戦争及び会の経済的要因によって, 中断した。そして, 1948年1月に6巻合刊として復刊されたが, それが最終刊になった。
- (3) これらの著作についての解説は, 上の韓明謨, 楊雅彬の著書に詳細なものがあるので, ここでは触れない。
- (4) 孫本文, 社会学原理, 1935年, 商務印書館, 例言, p. 1。
- (5) 孫本文, 同上, 例言, p. 2。
- (6) 孫本文は講演のなかで, 中国の社会学の歴史と今後中国の社会学がなすべき課題について述べている。すなわち, 1931年にはすでに, 中国の社会学は萌芽期(初めて社会学が輸入されてから清末期まで), 建設時期(1911年の辛亥革命から1930年の中国社会学社の成立まで)を経て進展時期(中国社会学社の成立から始まり, 現在は進展時期の始まり)に入ったと考え, 今後中国の社会学がなすべきこととして次の5項目をあげた。すなわち, ①基本工作の進行, ②実際の問題の研究, ③各大学の分業合作, ④全国の人材の集中, ⑤大学生の訓練である。そして, つぎにこの①の内容をさらに4つあげている。つまり, ①世界の社会学の名著及び欧米の重要な学説や方法を系統的に紹介すること。ならびに訳語をはっきりと定めること, 社会学辞典を編纂すること, 大学の社会学教科書及び参考図書を編纂すること, ②中国固有の社会学の史料を整理すること。孫本文によれば, 中国の旧籍のなかには非常に豊富な社会学の資料が含まれているので, 社会現象或いは社会問題に関する先人のさまざまな思想について整理しなければならない。系統的な中国社会学思想史を編成して, 文物制度に関する各種の資料を整理して, 中国社会学制度史或いは中国發明史を編纂し, 参照に供すること, ③中国社会の特徴の实地研究すること。これは主に中国の各地の重要な文化地区について, 適切な系統的な实地調査を実施して, 人びとに中国の社会や文化に対して正当な認識をもたせるようにすること, ④中国の社会学を建設すること(孫本文, 1932年, 中国社会学之過去現在及将来—中国社会学社第1次年会演詞, 中国社会学社編輯, 中国人口問題, 8月版。ここでは陳樹徳・許妙堯編, 1986年, 中国社会学史資料選編(上冊), 社会学專業教学用書, 上海大学文学院, pp. 197-212から転載)。さらに1947年には「中国社会学者今後努力方向之商榷」のなかで社会学者に西洋の社会学に遅れていることを自覚させ, 中国の社会学界が努力すべき方向を提示しているので, 簡単に紹介しておきたい。第1, 中国の理論社会学の樹立。(1)中国固有の社会史料を整理すること, (2)中国社会の特徴を实地に研究すること, (3)社会学の基本的図書を系統的に編集すること。第2, 中国の応用社会学の樹立。(1)中国の社会問題を詳細に研究すること, (2)中国の社会事業と社会行政の検討を強めること, (3)中国社会の建設の方案を本腰を入れて研究すること。第3, 社会学の人材を養成することである(孫本文, 1947年, 中国社会学者今後努力方向之商榷, 中国社会学訊((中国社会学社第8届年会特刊)), 中国社会学社, 第5期, pp. 1-2)。
- (7) Wong Siu-lun (黄紹倫), 1979, *Sociology and Socialism in Contemporary China*, RKP, p. 1。
- (8) 孫本文, 1935年, 前掲書, 序, p. 1。
- (9) 孫本文, 1935年, 前掲書, p. 16。
- (10) 孫本文, 同上, pp. 108-115。
- (11) 孫本文, 同上, p. 258。
- (12) 孫本文, 同上, p. 293。

- (13) 孫本文，同上，p. 293
- (14) 孫本文，同上，p. 293。
- (15) 福武直，1979 年，中国の社会学とその復活，日本社会学会編，社会学評論，第 30 卷第 2 号，pp. 60-61。
- (16) 楊雅彬，2001 年，近代中国社会学史（上），中国社会科学出版社，pp. 384-394。
- (17) 孫本文，1935 年，前掲書，pp. 631-632。
- (18) 楊雅彬，1985 年，中国社会学史，山東人民出版社，p. 328。
- (19) 韓明謨，1985 年，前掲書，p. 128。
- (20) 韓明謨，同上，p. 128。
- (21) 韓明謨，同上，p. 129。
- (22) 韓明謨，同上，p. 126。
- (23) Inkeles, Alex, 1964, *What is Sociology*, Prentice-Hall. 辻村明訳，1967 年，社会学とは何か，至誠堂，pp. 204-205。
- (24) 孫本文，1958 年，堅持反对資産階級社会学復辟，科学出版社編輯部，反对資産階級社会科学復辟，pp. 174-180。

〔付記〕

本稿は佛教大学の 2003 年度特別研究助成（課題：新中国成立前後の中国社会学の特徴について）の研究成果の一部である。

（ほし あきら 社会学科）
2003 年 10 月 15 日受理